

生存科学研究ニュース

VOL. 10. NO. 1.

1995. 1. 10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

電話 03-3563-3518

第5回生存科学シンポジウム

平成6年11月19日(土)午後1時30分より、京都市東山区泉涌寺山内観音寺大講堂において第5回生存科学シンポジウムが開催された。

講演第1席は、生存科学研究所専務理事小平敦氏による「武見太郎と生存科学研究所」で、小平氏は、武見太郎先生が日本医師会会長として在職25年にわたり日本医師会雑誌・日本医師会ニュースその他に発表された60編に及ぶ年頭所感を通読し、その中のキーワードとなるいろいろな言葉、例えば「人間開発」「プロフェッショナルリティー」「自己改革」「生命の畏敬」「生存の理法」等の使われ方を追いながら、武見先生の思索の過程をたどり、その思想と生存科学への道筋を披露した。

講演第2席は、京都大学名誉教授・生命誌研究館館長岡田節人氏による「生命の科学と生きもの科学」で、氏は、博物学と分子生物学の両方の研究経験を踏まえながら、科学にも情感はある、この題で自らの心情を語ると前置きし、生命は「いのち」とも読み、人々の心に訴えるところが強く「生きもの」は「いのち」ほど高く評価されていないのが残念であると述懐したうえで、生命科学と生物科学について述べた。

生命科学は、例えばDNA分析のように普遍的である。「バクテリアが分かれば人間が分かる」というのは間違いであるが、「大腸菌で真であれば象でも真である」というのは基本的に正しい。しかし、そうであるなら生物学はいらないと考えられたが、それは間違いである。21世紀には分類学は変容する。いまや進化は遺伝子で、数量的に、客観的に語れるようになった。生物学は再び多様性を見だしそれを評価するようになった。21世紀には、科学に無関心でいることは危険である。

その後、多数の興味あるスライドを示しながら、生物の多様性と共通性、進化等について説明し、博物館はこれからはバイオミウジアムとしての役割を果たすべきであるとして、多様な生きもののDNAや細胞を後世に残すことを提唱した。

最後に、自ら2つに切れて2匹になるある種のプラナリアの増殖を披露し、死なない生命という問題を提示し、また、生物に関わる自然環境にも当然興味をひかれるが、これにあまり引きずられるのは問題であるとも警告を発した。

講演第3席は、東京大学名誉教授玉城康四郎氏による「生きること」で、氏は、自分は人生の最晩年で余生はいくばくもなく、現時点での自己の

最高の問題を申し述べるが、それは3日も4日もかかっても語り切れないものであり、それを1時間で述べるのであるから理解してもらえないであろうが、そこから何かをくみ取って頂ければ幸いであると前置きしてから、文献的考察を加え、釈迦、キリスト、ソクラテス、孔子の共通するところを示しながら、仏陀の道について以下のように述べた。

仏陀の道は自分のような平々凡々な人間にも分かりやすく道理に適ったものである。しかしそれは頭ではなく体で考えなければ分からないものである。考えているうちに仏陀と同じところに来て命が体に明らかになる。生きている命は仏陀と同じとなる。キリストにもソクラテスにも孔子にも通じる。歴史的に展開してきたそれらは全く異なりながら、全人格的思惟とかたちなきいのちが全人格体にあらわになるという点で共通している。それに至る方法としての瞑想も共通である。しかし、その方法が残されているのは仏陀の道の禪定だけである。

禪定とは脳、心、魂、体が一体となって生きることで、全人格体に統一されて、生命体の根源に無限に近づく。それを意識している自分自身がその自身を包んでいる。環境（宇宙）が近づき、自分の生命体が宇宙の中に塗り込められ、いつの間にか宇宙そのものの命が一塊の命に通じてきて業熟体にあらわになる。だから私自身が宇宙全体と結んでいる。プライベートの極みであると同時に最もパブリックなものである。釈迦、キリスト、ソクラテス、孔子という人類の教師は、その営みを我々に実現させようと努力してきた。我々の祖先が目覚めてできたことだから現代の我々が目覚めないはずはない。人類の教師は人間のやっ

ることは間違っているといっている。カントの純粹理性批判は理性そのものが間違っていると言っている。科学者はこの原点に行き着いてもらいたい。次ぎに為政者（共同体のトップに立つ人）にも。ただし急いではだめである。

第16回「東西の健康観・医・薬」研究会 「倫理と宗教で健康になれるか？」

11月29日（火）午後2時より、（社）倫理研究所学生教育部長・丸山敏秋委員と、東京大学文学部宗教学科教授・島藪進氏により報告がなされた。

丸山氏は、「倫理と健康」と題して、まず祖父の丸山敏雄氏が1945年に創立した倫理研究所について話された。そこでは「苦難」は生活の不自然さや心のゆがみが映った「赤信号」であり、その原因になっているエゴイズム、わがまを反省し、不自然な心や行為を改める実践行動が必要であり、純情、すなおになることが最終目標である。「肉体は精神の象徴、病気は生活の赤信号」と考えられ、病気は自己実現をする良い機会であり、それを喜んで受け入れ、その奥の原因であるひがみ、心のゆがみをただすことが大事である。純粹の心境が治癒力の高まりをもたらすと考えられる。両親に対する「恩の遡源」で体験するケースが多い。慢性関節リウマチが治癒した例が紹介された。

島藪氏は、「宗教・医学・代替知」として、現代宗教と代替知運動について話された。「新靈性運動」は、米国では60年代、日本では70年代から始まった。その具体的な形態は多種多様であるが、それらの基本的特徴として、自己変容・意識変容がある。この「新靈性運動」の源流には、欧

米での神智学やメスマリズムなどとともに「代替知運動」がある。「代替医療」は欧米でも長い歴史があり代替知運動の一要素ともなる。「代替知」は、体系性、確実性、専門性、経済効率などを特徴とする「近代知」のオルタナティブとして位置づけられる。代替知の方から見ると代替医療のみならず、食餌法、代替農業、心理療法、経営・営業法、武道・芸道など様々な分野に見られる。それらは、自然観、道徳観、調和などを共通の指向とした知識体系を持つ。代替知は、科学の方からも見直されて興隆しているが、一方で商業化、システム化され、共同体から取り出されて脱生活世界化する傾向にもある。

討論では、合理的知識とのギャップとそれを埋める方法、病因を<不自然>に帰すことの危険性、代替医療の評価の主体と方法、疫学的研究法の可能性、病気と病苦、他者の幸福との関係など多方面にわたる議論がなされた。

「第5回武見賞授賞式」

12月10日（土）午後2時より、生存科学研究所会議室において平成6年度の武見賞授賞式が行われた。ニュース前号で紹介したように、平成6年度から武見賞は、武見記念賞と生存科学研究武見奨励賞とを別々に選考するのではなく、同時に選考して2名までを表彰することとなったが、今回は若月俊一氏一人が武見記念賞の授賞の対象となった。

授賞式には、公益信託武見記念生存科学研究基金運営委員会板垣委員長他の運営委員、財団関係者、歴代受賞者等が列席、板垣委員長の挨拶、選考理由の説明の後、記念賞、記念盾、副賞が受賞者に贈られ、次いで、受賞者若月氏から挨拶ならびに受賞を記念しての講話が行われた。

板垣委員長は冒頭の挨拶で、現代は歴史の激動期であり、人間と自然の共生が叫ばれているが、人類の生存秩序とそれを貫く理法の研究と実践の必要を武見先生が時代の先き行きを見通して我々に唱導されたと、武見記念賞の現代的意義の大きさを強調した。

若月氏は、武見先生から世界医師会での日本代表として特別講演者に推薦されたこと、「プライマリケアの医科学」執筆を依頼されたことなどの思い出を交えて挨拶された後、「地域包括医療50年の経験から」と題して講話され、東大大学院外科教室在籍中、工場災害の患者の多さから、工場の現場視察をして安全対策の欠如に驚き、予防対策の必要を書いた本を出版して官憲に捕まったこと、そんないきさつから戦後長野県の僻地農村にある佐久病院（当時は診療所）に赴任し、それから50年地域包括医療に取り組んだが、疾病の予防・早期発見・早期治療の必要から、無医村の巡回診療を始めて医師会と摩擦を生じたこと、一般病院内に、日本で初めて伝染病棟を作り地域の町村に反対されたこと（後に進駐軍がサポートしてくれた）、在宅末期癌患者の鎮痛のためのモルヒネの使い方保健所と喧嘩をしたこと、昭和27年に日本農村医学会を作ったが、医師にコミュニティーがなかなか理解されなかったこと、地域医療をしっかりとやるには地域と仲良くなっていないとできないこと、明治以来の民主主義と農村の問題等を述べ、医療は文化活動としてやらなければ包括性は出てこない、包括性は基本的医療のモチーフと人間の生存とにつながる、自由、平等、博愛の3つもこれに入ることを強調した。最後に、高齢化社会が到来し、厚生省は在宅ケアを言っているが、日本ではマイホームはあっても

ファミリーが変わってきている、「宅」とはなにか？その中で今我々は悪戦苦闘している、と現在の問題提起をして講話を結んだ。

平成6年度第4回常務理事会

11月8日（火）午後3時より、研究所会議室において平成6年度第4回常務理事会が開催され、基本構想委員会についての協議と、安家、別府等、進行中の実践的研究その他の報告がなされ、また、前月の常務理事打ち合わせ会において検討された雑誌「生存科学」、ニュースのあり方について検討された。

雑誌については、細部は次の常務理事打ち合わせ会で検討することとして、従来の学術誌「生存科学」に準じる論文調の原稿を主とするものと、生存科学を基盤とした提言やコミュニケーション等、生存科学についての理解を深め研究を進展するのにより適した原稿を主として掲載するものの2種類を作ることが決まった。

さらに、10月の武見記念生存科学研究基金運営委員会での武見賞選考の経過と結果が報告され、また、研究所として、武見賞には生存科学を創った武見太郎先生の志を継ぐものを選ぶという方針を確認した。

12月13日（火）午前10時から開催された常務理事打ち合わせ会では、11月の常務理事会の決定を受けて雑誌作成の具体案を検討し、同時にこれに関連する学会や研究会のあり方が協議された。

当日午後には、九州プロジェクトの肝属郡の問題を含め鹿児島県全地域における研究プログラムについて幅広い新たな協力関係を作るための検討を行っている。

別府子ども学フォーラム 「子どもは未来である」のお知らせ

日時 平成7年1月14日（土）午後1時～5時
場所 大分県別府市杉乃井ホテル
主催 別府市、財団法人生存科学研究所
後援 厚生省、大分県社会福祉協議会、大分県、
全国社会福祉協議会、こども未来財団

基調講演 大江健三郎（作家）
フォーラム座長 小林 登（国立小児病院院長、
生存研副理事長）
伊東孝廣（別府市医師会会長）

フォーラム参加者
東 洋（白百合女子大学教授）
石井威望（慶應義塾大学教授）
黒川 徹（国立西別府病院院長）
たけながかずこ（マザリング研究所所長）

入場料 無料
生存研会員の方の参加を歓迎します。
（なお前号ニュースの予報では開始が午前となっていたようですが、午後1時から開始となりました。ご了承ください。）

研究所日報

11月17日（木）別府市総合調査研究委員会
12月21日（水）同 上
12月25日（日）肝属プロジェクト打ち合わせ
自治医科大学において